

「死生学のすすめ」

聖路加看護大学教授・疫学 山 本 俊 一

東京大学教授・免疫学

多 田 富 雄

脳死、終末期医療、死ぬ権利など医療の中での死が話題を賑わしている。多くは、客観的な死の認定や処理をめぐる医療技術論、法律論に終始しているのに対し、この書物は、主体者である人間の内的な死の感知と受容について、生物学的、精神医学的、社会医学的、そして内省的、哲学的な考察を試みている。

第三者の死については、医療技術論でも扱えるが、主体的な「自己」の死は、同じ視点から自然現象としては扱えない。養老孟司氏の言うように、自分では経験することのない「一人称の死」というのはありえないのである。それでは、人間にとって「自己」の死とは何であろうか。

優れた衛生学者である山本俊一氏は、この問題を単に情緒的・哲学的に扱うのではない。「生を衛^{まも}る学」としての衛生学の立場から、生と死の葛藤について、医学的、そして生物学的な省察を試みるのである。死に近づき、死と直面し、死すべき存在であるところの人間。その人間の生命が、来るべき死に対してどのよ

うな反応様式を示すか。それは、生命が様々な外的ならびに内的なストレスに反応するのと同じルールに従うはずである。その反応様式を知ったうえで、避けることのできない死を受容してゆく道を探求しなければならない。

山本氏は、ことに「自己」の死に対する反応性の欠如について興味ある考察をしている。多くの人々にとって、「自己」の死の認識は存在しない。それは、免疫系において、「自己」に対する反応性が欠如しているのと同じである。「自己」以外の他者、ことに同種近縁の者の死に対して、あれほど強い精神的な反応(一種の拒絶反応)を示すものが、なぜ「自己」の死を現実のものとして認識し反応しないのか。免疫系で「自己」反応性が排除抑制されているように、「自己」の死に対するレセプターがなんらかの形で覆われているのではないかと山本氏は考える。

免疫学でも「自己」反応性の排除の仕方についてはまだまだやかましい議論があるので、考察の細部にお

ける当否はさておいて、この書が人間の内的な死に対する受容反応の多様性に、生物学的な光を当てたことは特筆に価する。ここでは、死は単に客観的な普遍的な事実ではなくて、主体者としての個人との「関係」において捉えられる。免疫反応が、「自己」と「非自己」の関係の上で規定されるように。

そうした「関係」の上でみることによって、死の医学的、社会的、文法的な意義はいっそうはっきりしてくる。死を扱い、死を受容し、死を考えるのはそれぞれの個人である。多様な個人が、死にゆく存在としての人間をどのように眺め、どのように看取り、更にどのように自らの死を選び取るかを考えるための基礎を、この書は与えているようにみえる。老人医療、終末期医療、生命倫理などの問題に携わる方々の一読をお奨めしたい。

● A5 224頁 図2 写真10 1992
定価 3,090円(税込) ㊦300円

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)